

私の古典学習法

本誌審査委員 滝口 雅弘 〈前編〉

臨書で視野を広げる



滝口 雅弘（たきぐち・まさひろ）



昭和51年 愛知県生まれ
平形精逸先生（本誌編集顧問・日展会員）

〈略歴〉

静岡大学教育学部総合教育課程芸術コース
美術・書道選修卒業
静岡大学大学院教育学研究科国語教育専攻
修了
SBS学苑書道講座講師
静岡大学非常勤講師、静岡英和学院大学非常勤講師
常勤講師

〈現在〉

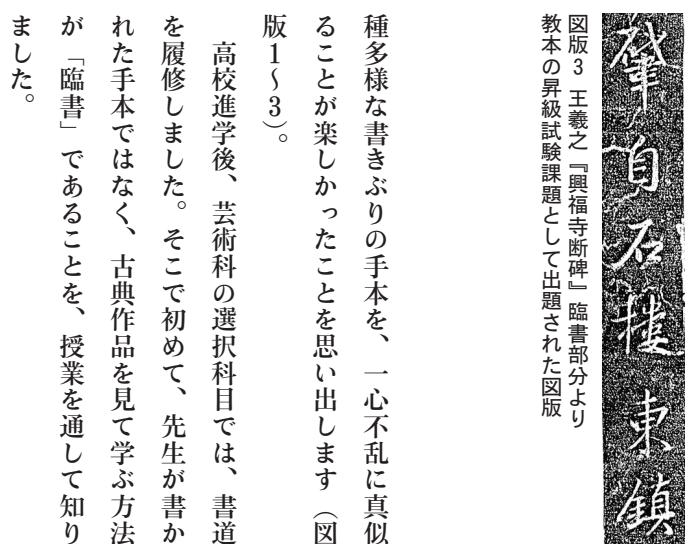
月刊「書写書道」手本揮毫・審査員、文部科学省検定教科書執筆協力、読売書法会評議員、謙慎書道会理事、全国大学書写書道教育学会・全国大学書道学会・書学書道史学会各会員

小学一年から習い始めた書道。現在に至るまで、人とのご縁や古典との出会いの積み重ねが、私の書道人生をかたちづくっています。

前編では、臨書との関わりを通じて、内面や行動でどのような変化が生じたのかに焦点を当て、自身の経験を振り返り、臨書学習を進める上で大切にしてきたことをお話しします。

— 古典の多様な書きぶりに触れる —

初めて書の古典に触れたのは高校入学当初の書道教室の稽古時です。使用していた書道教室の教本を改めて見返しますと、「臨書」の課題は特に見られず、「初段以上規定手本○○先生臨」とあり、古典図版と参考手本が掲載されているだけでしたので、当時は臨書という言葉を知らなかつたのかもしれません。



図版2 参考手本



図版1 高校時の習作

参考手本（左：浅岡春華先生 臨）をもとに、古典学習を始めた高校時代。「一筆の間は呼吸をしないで書く」という教えの言葉が印象的で、先生の左横に立って、運筆リズムを注意深く観察していました。六文字を書き収めるだけでも一苦労でした。

II 不慣れな臨書で大学受験に臨む

高校三年次の進路相談で、担任の先生から、「書道が好きなら、得意な書道で勝負してみたらどうだ！」と力強い励ましと助言をいたいたことがきっかけで、書道を深く学べる静岡大学を志望し、本格的に受験対策に取り組むことにしました。

受験では手本は一切存在しません。授業で少し習ったとはいえ、手本のない状態で拓本から読み取って書く臨書には慣れておらず、苦戦したことが思い出されます。書道担当講師の先生からは、古典臨書ではとにかく字形を忠実に真似るようにとご指導いただきました。また、各書体に対応できる筆を求めるために、書道用品店に初めて足を運んだりしました。その店で終始緊張しながら、バネの利いた兼毫筆を購入した記憶があります。

最初の「蘭亭序」の授業では、王羲之の書の良さや魅力が解りませんでした。書道の名人の書に文字のゆがみや行のうねりがみられ、戸惑いを感じていました。それもそのはず、臨書の意味など考えずに書写の延長としか思つていなかつたからです。その後、臨書が自分にとつて身近になる時がやって来ます。



図版4 颜真卿『建中告身帖』臨書部分より



図版5 初挑戦した臨書の大作(臨『建中告身帖』)

向勢〈膨らみのある構え〉と筆圧の強弱、はねや払いの特徴が表現できるように努めましたが、字形と組み立てに課題が残りました。

III 臨書の大作に挑む

その後、念願の静岡大学教育学部への進学が叶い、当時教授を務めておられた平形精逸先生にお会いました。

静岡大学での講義の内容や流れは、見城正訓先生（本誌6月号参照）が述べられている通りですが、私の代は同期四人による共同学習でした。同じ古典を臨書しても四人それぞれの表現に個性や違いがあることに興味を抱き、個人学習では得られない、多角的な古典へのアプローチの大切さを学びました。

大学一年の夏休み鍊成合宿で取り組んだ臨書の大作は強く印象に残っています。大学に入るまで、半切の用紙までしか書いたことがなかった私にとって、三尺×六尺（90cm×180cm）の大きな画仙紙に立ち向かうには勇気が

要りました。唐の楷書作品の中から臨書の題材として、颜真卿の『建中告身帖』（自書告身）を選びました（図版4）。巧みな筆さばきと生き生きとした動勢に惹かれ、大作にふさわしいように思つたからです。

とはいっても颜真卿特有の筆法（いわゆる颜法）はやはり難易度の高いものでした。筆の弾力の生かし方、力の入れ方・抜き方のコツがなかなか掴めません。結果はまとまりに欠ける作品になってしましましたが、「集中して書き切った」達成感や爽快感を味わうことができ、大きな紙に向かう自信が持てるようになったと思います（図版5）。

篆書を素材とした制作を通して、たどたどしくった大作づくりにも少しずつ慣れていったのですが、樂あれば苦ありで、動きに変化を加えれば字形がどこか乱れ、点画を追えば動きが鈍くなります。思うように書けない中の影響を受け、そののびのびとした書きぶりに惹かれていきました。

IV 古典への好奇心が臨書意欲を高める

そして、篆書の古典を調べていくうちに、楚の金文や戦国文字、帛書（図版7）の存在を知りました。特に目を見張ったのは、一九

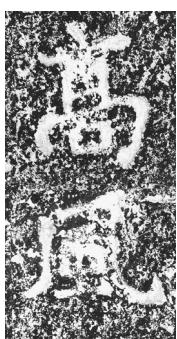


図版9 臨『郭店楚墓竹簡』
2×8尺(60cm×240cm)



図版8 『郭店楚墓竹簡 語叢二』
臨書部分より

扁平な字形で書かれている篇もありますが、小篆のようなスマートさと軽快な筆致が魅力的です。



図版11「鄭羲下碑」



図版10 『鄭羲下碑』の臨書

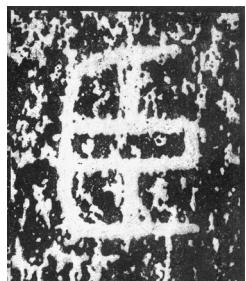
平形先生による臨書添削指導。「風」右肩の転折を、一律に「ゆるやかな遠回りの動き」と捉えた点が問題です。引き締める部分と大らかに書く部分の区別が必要でした。

九三年に出土した『郭店楚墓竹簡』(郭店楚簡)という戦国時代の竹簡です(図版8)。帛書に似た右上がりの字形と穗先を利かせた円転のリズムが心地良く感じられ、この臨書を通して、太細・潤渴の要素を取り入れた作品づくりにも挑みました(図版9)。

V 臨書によって自分の書の傾向を知る

鄭道昭の楷書作『鄭羲下碑』の臨書指導の折、平形先生から、「高風」の「風」について転折部分の添削をいただいたことがあります

ます（図版10・11）。それまでも先生から作品づくりにおいて、「引き締めや構築性が足りない」としばしばご指摘を受けていました。竹簡などの文字を好んで取り組んではからは、書き易く心地よい流動的な運筆リズムが、自分の中に定着していった反面、字形の構築性が失われていくのではないかという不安が心のどこかにつきまとっていました。ようやく、作品づくりと合わせて、自身の古典臨書を振り返り、見直すことで、自分の書は概して幅広で散漫になりやすい傾向にあるということに気付くことができました。



図版6 泰山刻石「臣」



圖版 7 楚帛書「臣」

表現の幅を感じさせる篆書。泰山刻石は重厚で堂々とした風格が感じられます。楚帛書は肉筆ならではの動きや呼吸を感じられます。

V 臨書によって自分の書の傾向を知る

ついどうしょう 鄭道昭の楷書作 『鄭羲下碑』の臨書指導

の折、平形先生から、「高風」の「風」について転折部分の添削をいただいたことがあります

VI 粘り強く臨書に取り組む

それ以降、臨書の取り組み方への意識が大きく変わりました。自分の足りない要素をより明らかにして改善したいと思い、一から平形先生のもとで学び直すことにしました。

字形や用筆を忠実に捉える「形臨」は言うまでもなく大切な学習法です。それに加えて、古典との対峙を通して、今の自分の状態を確認し修正していくことも必要と感じました。

今一度基礎基本に立ち返り、楷法の極則と称される『九成宮醴泉銘』と隸書の規範として名高い『曹全碑』の臨書に取り組みました。事前に自分なりの視点で臨書したものを見た。事前に自分なりの視点で臨書したものを先生に添削いただくのですが、時折朱を入れず、新しい半紙に「自分ならこう書くよ、参考にしてみて」と臨書揮毫をいただくことがありました。それは私の見方・捉え方・書き方の甘さや癖が多分に出てしまっている時です。古典を見ているつもりになっていて、実は注意深く観察できていなかったのです。

『曹全碑』に対しても、一般的には柔らか・甘美といった印象を抱きます。しかし、イメージや先入観だけで臨書すると、軽薄な作になりやすいことが身を持ってわかりました(図版12～16)。それは、先述の『鄭羲下碑』の

臨『曹全碑』の稽古



図版12 1回目「刻意・古意」が課題



図版13 参考手本(朱墨) 平形精逸先生・臨



図版14 2回目 大小・下部安定が課題



図版15 3回目 うねり・曲線美が課題

VII 臨書学習の経験から振り返る

臨書で、「転折はゆつたりと曲がる」と固定観念に囚われて決めてかかるのと同様です。古典の特徴を念頭に置くことに加えて、疑つて見ること、字書で調べることも重要であると改めて痛感しました。

試行錯誤は今でも続いていますが、古典臨書が単に書き方の技術の幅を広げるだけでなく、私の見方や捉え方など視野を広げさせてくれたのは確かです。

学習を進める過程で私が大切にしてきたことを3点挙げるならば、①多種多様の古典に触れること、②興味を抱いた古典についての探求心を持つこと、③自身の臨書に対する他の者の評価を取り入れて内省を充分図ることです。

当初、私の臨書学習の目的は、創作に生かすためだと考えていましたが、後に大切な気付を得るために必要な臨書へと変わりました。

後編では、その後の臨書観の変化と具体的な学習法についてお伝えします。